彫刻家
「エディス・マリオン」について
Louisa Edith Church Maryon

〔内容〕

・エディス・マリオンの生涯
・エディス・マリオンの彫刻作品（画像）
・シュタイナーのマリオンについての言葉
・GA263から「マリオンの生涯について」
　（コンラート・ドナート：GA編集者）



神秘学遊戯団

■　彫刻家「エディス･マリオン」について

・エディス･マリオンの生涯
・エディス･マリオンの彫刻作品（画像）
・シュタイナーのマリオンについての言葉
・GA263から「マリオンの生涯について」
　（コンラート・ドナート：GA編集者）

エディス・マリオン（Louisa Edith Church Maryon）は、
イギリスの彫刻家で、シュタイナーの最も親しい協力者の一人。
1872年2月9日ロンドンで生まれ、
1924年5月2日スイスのドルナハで亡くなっている。
人智学運動の創設期に深く関わり、シュタイナーとともに
木彫の大型作品「人類の代表者」を制作したことで知られている。

当時としては珍しい女性彫刻家として活躍し、
晩年にはゲーテアヌムの美術部門（彫刻部門）の責任者として、
人智学の芸術分野を支えた。

※画像
・「The Seeker of Divine Wisdom」（神の叡智を求める者）
　※シュタイナーに始めて会う際に送った作品の写真



・人類の代表者



・オイリュトミー人形



以下、簡単にその生涯を時系列で追う。

〔エディス･マリオンの生涯〕

・1872年～1900年代初頭
　生い立ちと教育

幼少期から霊的な探求心が強く、
少女時代はロンドンの女子校に通った後、
スイスのジュネーブにある寄宿学校で学ぶ。
1890年代に入り、彫刻の道を志し、
ロンドンの中央デザイン学校で基礎を学ぶ。
1896年からは王立美術大学で学び、
1904年には同大学の準会となる。

初期の作品は
古典主義からアール・ヌーヴォーへの移行期のスタイルで、
人体の解剖学的理解が深く、優雅で詳細な造形が特徴。
彼女の内面的な精神探求を反映し、
「神の叡智を求める者」「ゴルゴタの十字架」など、
キリスト教を強く意識したテーマの作品を制作している。

・1912年～1914年
　シュタイナーとの出会いと人智学への道

当時マリオンはイギリスの別の秘教団体
（おそらく黄金の夜明け系）に所属していたが、
R.W.フェルキン博士の紹介でルドルフ・シュタイナーと出会う。
（ロバート・ウィリアム・フェルキン（Robert William Felkin）は、
芸術家であり、医学博士、探検家、
そして著名なオカルト主義者（魔術師）として知られている）

1913年にはミュンヘン、次いでベルリンに移り
、1914年夏にはスイス・ドルナハへ移住。
マリー・フォン・ジーフェルスやイタ・ヴェークマンとともに、
シュタイナーの最も内輪のサークルに入り、
以後、死ぬまでシュタイナーとの個人的・芸術的な交流は続き、
膨大な往復書簡が残されている（GA263）。

マリオンはシュタイナーを「師」として深く敬愛しつつ、
芸術家として対等に協力する関係を築いた。
シュタイナーは彼女を「ミューズ」として信頼し、
共同制作では互いに修正を加え合うほどだった。

・1914年〜1923年
　ドルナハ時代と主な芸術活動

ドルナハへの移住後、第一ゲーテアヌムの建設に尽力したが、
最大の業績は、シュタイナーとともに制作した
木彫の大型群像「人類の代表者」である。

この9メートル級の作品は、
ルシファーとアーリマンの間に立つキリスト像で、
膨張と収縮の二元性をバランスよく示している。

シュタイナーがデザインを主導し、
マリオンが木彫の大部分を担当。
1922年末の第一ゲーテアヌム火災でも無事で、
現在は第二ゲーテアヌムに常設展示されている。

その他、表現主義的なスタイルで、
動きと霊性を融合させた作品、
オイリュトミーのための木彫像も多数制作している。

1920年から1922年にかけては、
ドルナハのスタッフの住宅不足を解決するため、
3軒の住宅（当時「英語ハウス」、現在「オイリュトミーハウス」）を
設計・資金調達し、建設を主導した。

・1923年〜1924年
　晩年・病気と死

1923年のクリスマス会議において、シュタイナーは
彼女をゲーテアヌムの「美術部門（彫刻部門）」の責任者に任命したが、
1923年頃から結核を患い、病床にありながらの任命となった。

彼女はシュタイナーのスタジオを守る「守護者」のような存在として、
1916年には足場から落ちそうになったシュタイナーを救ったこともある。
シュタイナーは彼女に多くの信頼を寄せ、
個人的な相談をしたりするほどの関係だった。

1924年5月2日には、ドルナハで52歳の若さで亡くなっている。
シュタイナーは彼女の火葬式で追悼演説を行い、
彼女の献身を称えているが、
その約1年後にシュタイナー自身も亡くなっている。

〔シュタイナーのマリオンについての言葉〕

●1918年7月3日、ベルリンでの講演（GA 181）より

・ドルナハの建築及び木彫の大型作品「人類の代表者」について

「このグループ像は、舞台室の東側下方に置かれています。その上には小さなドームが広がり、私がすでに示唆したように彩色されています。このグループ像の上部では、同じモチーフを今度は絵画的に表現しようと試みられています。そこにはキリストがおり、その上にルシファーとアーリマンがいます。そして、芸術によって表現されるべきことを、色彩を通じて語り出そうとしています。扱い方の違いによってこそ、物事が純粋に芸術の手段そのものから引き出されなければならないことが理解されるでしょう。

これらの作品は、私たちの多くの友人がこの建築のために最大の献身をもって働いたからこそ、このような形になったのです。この建築については実に奇妙なことが語られてきましたが、いつの日か、私たちの協会に生きる友人たち、特に芸術家たちが、どれほど無私の心でこの建築に身を捧げたかという、献身的な働きぶりにこそ注目されることになるでしょう。このグループ像の制作では、特別な芸術的問題が生じました。例えばマリオン嬢は、世界観的思想を芸術的思想へと移し替えることに、実に素晴らしい適応力を見せました。建築はもちろん未完成です。しかし、もしこの破局的な世界的事件がなければ――このグループ像を除いては――完成していた可能性が極めて高かったでしょう。」

●1922年8月4日、ドルナハでの講演（GA 279）より

・オイリュトミーのための木彫像について

「ここで示された形象的な表現、特にオックスフォードでのオイリュトミー上演と同時にオイリュトミーの理解を助けるためにこうした表現を用い、オイリュトミーの本質をより明確にしようとしたものについては、私がこの点に関していくつかの意図を、少なくとも最初に喚起しようと試みたことがお分かりになるでしょう。そして、これらの表現は、最近になってマリオン嬢の熱心な努力によって完成されました。」

●1922年12月1日（金）、講演後のアナウンス（GA 219）より

「次に申し上げたいのは、再びオイリュトミー人形のシリーズが制作されていることです。これはマリオン嬢のアトリエで行われています。現在半分でき上がっている人形は、約10日後には完成します。一連のものは少しお手頃な価格になります。20体で250フラン、1体ずつでは13フランです。――もうすぐクリスマスの時期になりますので、このような美しいクリスマスプレゼントにされるのもよいかと思います。

翌日の夜、シュタイナーはさらに次のように述べました。

昨日申し上げたことについて、忘れていた小さな点を補足します。私はこれらの人形が素敵なクリスマスプレゼントになると申しましたが、そこに少し含みを持たせていました。申し忘れましたが、このプレゼントによる総収入はすべて、現在のゲーテアヌムが必要としている資金として、ゲーテアヌムに寄付されます。」

●1923年8月17日、イルクリーでの講演（GA 307）より

「オイリュトミーが「動く目に見える言葉」であることは、すでに繰り返し説明してきましたし、上演の導入部でもその主題となってきました。ここではさらに、オイリュトミーと芸術全般との関係を、これらの人形を例にとって少し深く掘り下げてお話ししたいと思います。

これらの人形はマリオン嬢の提案によって生まれましたが、その後、私自身がオイリュトミーの法則に基づいて絶対的に正しいと考える意図に従って、完全に制作されました。

特にこうした人形を例に挙げてお見せしたいのですが（ここでS音の人形――木で制作され彩色されたS音の像――をお見せします）、オイリュトミーが芸術としてどのように考えられているかをお分かりいただけるでしょう。このような人形をご覧になると、それは一人の人間を表しています。しかし、現代の文明や慣習に従って「美しい人間」を見ようとする人は、ここに「美しい人間」を見出すわけではありません。通りで人に出会ったときに気に入るようなものを、ここでは見出さないでしょう。

もちろん、人形を造形する際にも「美しい人間」への好みはあります。しかし、これらの人形の造形の目的は、美しい人間を表現することではなく、オイリュトミーにおいて直接的に表現されるもの、すなわち「人間の動き」を表現することです。そこで、動きの形式そのものから生まれるもの以外のすべて――この動きから感じられる感情や、この動きが表現する根本的な性格――が、意図的に除かれています。

歌を歌うとき、あなたは魂を動かすものを、身体全体の器官の中に取り込みます。すると、人間の中で動いているものは皮膚の内側に留まり、動きは完全に目に見えなくなり、音として聞こえるものに変わります。

これ（オイリュトミー）は「動く音楽」です。魂が感じるものは人間から完全に離れ、人間の空間における動きとなり、その動きが形を取った姿に芸術性が表現されます。普段聞くものを、見るのです。だからこそ、動きになるものだけに目を向けなければなりません。そのため、人間が自然にもっている他のすべての要素は抽象化され、人間がオイリュトミーを行うときに「なる」ものだけに焦点が当てられています。私は特に、動きの一つひとつを木を切り抜くことで示し、それぞれに基本色を与えました。

人形の後ろには、動きに対応する基本色が記してあります。また、感情に対応する基本色も記されています。舞台でオイリュトミーを行う人々がヴェールを巧みに操るのをご覧になると、それは動きの延長です。これがさらに発展し、適切な瞬間にヴェールをなびかせたり、引いたり、受け止めたり、形作ったりするようになります。肢体による動きは、ヴェールの扱いによって感情を表現するものとなります。そして、ヴェールのなびきの中に感情が表現されるのです。」

●1923年8月26日、ペンマエンマウルでの講演（GA 279）より

・オイリュトミー人形についての詳細な説明部分

「これらのオイリュトミー人形は、非常に特別な方法で制作されています。これらを、人間の形の塑像的な模倣などと見てはいけません。それは塑像や絵画の領域です。ここでは、人間の中でオイリュトミー的に働いているものだけを、本当に表現しようとしています。したがって、静止した人間の形を美しく塑像的に表現することではありません。オイリュトミーの中に「美しい人間の顔」を見出さなければならないと思う人は、オイリュトミーに対して誤解を抱いているのです。オイリュトミーでは醜い人間の顔が見えてもかまいません。なぜなら、顔が美しいか醜いか、若いか老いているかなどは問題ではなく、オイリュトミーを行うこの人間が、自分の全人間的本質を、形作られた・形作る動きの中にどれだけ移し入れることができるかだけが問題なのです。」

「これらの人形はマリオン嬢によって提案され、制作されました。しかし、さらに詳細な造形は、私の指示に基づいて行われています。芸術的に見ても、切り抜き方や色彩の与え方において、純粋にオイリュトミー的なものを、人間の中でオイリュトミー的でないものから完全に切り離すことが目的です。」

●1923年12月28日、設立総会より（GA 260）

「私は何年も前から、ゲーテアヌムのための造形芸術の実践において、マリオン嬢が私の側にいてくれました。残念ながら彼女は現在、重い病に臥せており、この会合にも来ることができません。しかし、しばらくして回復した暁には、ここで話している仕事に専念できることを願っています。私は、造形芸術全般、特に塑像芸術においてここでなされるべきことを、この部門の責任者であるマリオン嬢を通じて行います。」

●1924年1月21日、ゲーテアヌム支部総会より（GA 260a）
（副会長選出の場面）

「シュテッフェン氏は、Pyle氏を書記に、マリオン嬢を副会長に推薦したいと述べました。

シュタイナー：どなたかご意見は？　それでは、パイル氏を書記に、マリオン嬢を副会長に推薦します。まずパイル氏にお伺いしますが、もし選ばれたらこの職をお引き受けになりますか？

パイル氏：できる限り喜んでお受けします。私が最も活躍できるのは、マリオン嬢を助けることによってではないかと思います。

シュタイナー：あなたの決定に多くのことがかかっています。マリオン嬢は、あなたが引き受ける場合にのみこの職を受けると述べています。彼女は病気ですし、あなたと協力してこそこの仕事を遂行できます。したがって、マリオン嬢が引き受けるかどうかはあなたの決定次第です。

パイル氏：それでは私の決定は明確です。

（結果として満場一致で承認されました）」

〔訳註：「パイル氏」について。William Scott Pyle（ウィリアム・スコット・パイル、1889年6月22日生まれ - 1938年2月13日没、オランダ・ハーグ）は、アメリカ出身の画家で人智学者。シュタイナーのゲーテアヌム周辺の芸術活動に深く関わり、特に美術部門関連の役割を担った。〕

●1924年5月2日のエソテリック・タイムより
（エディス・マリオンの死去を知らせる言葉）

「私の愛する友人たちよ！　皆さんは今朝、マリオン嬢がこの物理的平面を去ったという知らせに、深く動かされたことでしょう。これは長らく予見されていた出来事であり、実に重い病が1年以上続いた末のことでした。

　明日、協会の全会員が集まったときに、マリオン嬢のこの世からの旅立ちについてお話しします。今日は、第一級（エソテリック・クラス）も、彼女という真に忠実で献身的な弟子を失ったことを申し上げるだけに留めます。彼女は、クラスで与えられたものを真摯で深い心で受け止め、病の最中にもその エクササイズを自らに働かせ、極めて親密に生きていました。」

●GA263より「エディス･マリオンの生涯について」
　ZUM LEBENSGANG EDITH MARYONS
　（コンラート・ドナート（Konrad Donat）：GA編集者）

「エディス・マリオンの人智学との出会い以前の生涯については、ほとんど知られていません。しかし、以下に記す内容は文書に基づく確実な情報です。

エディス・マリオンは1872年2月9日、金曜日にロンドンで生まれました。多くの先祖が聖職者でした。4月10日にメアリルボーンの「Holy Trinity」教会で洗礼を受け、ルイーザ・エディスという名前を与えられました。

後年、彼女は自分のファーストネームに母の旧姓である「チャーチ」を加えることを好みました。家系図によると、彼女には7人の兄弟姉妹がおり、彼女はその中で2番目の子供でした。ロンドンのマリア・グレイ学校に通った後、ジュネーブでさらに教育を受けました。その後、彫刻を学ぶために進学しました。学業修了後、彼女は何度もイタリアを訪れ、特にアッシジとその周辺を好みました。そこで彫刻の研究を深めました。ルドルフ・シュタイナーの言葉によれば、彼女は「その道において完成された芸術家であり、多くの成功を収めた人でした。精神的内容を、調和的で美しい形式で表現することが彼女の特別な領域でした。彼女の芸術の技術面を、完全に習得していました」（GA 260a）。

専門家の間では、彼女は認められた芸術家の一人として位置づけられていました。『ブリタニカ百科事典』（1911年版）には、イングランドの若手で指導的な女性彫刻家の一人として掲載されています。1900年から1912年まで（1907年を除く）、彼女はロンドンの王立芸術アカデミーに作品を提出し、公開展示されました。（詳細は「エディス・マリオンの生涯に関する年表」に記載されています。）こうした展示を通じて、専門誌に写真が掲載されるなど、広く知られるようになりました。彼女の作品のタイトルは、彼女の芸術的関心をよく表しています。例えば「The Enchanted Garden」（魅せられた庭）、「Priestess of Isis」（イシスの女祭司）、「The Messenger of Death; 'One shall be taken, the other left'」（死の使者；「一人は取られ、他の一人は残される」）などがあります。また、当時著名な人物たちも彼女に肖像を依頼しました。

彼女は強く霊的なものを求めていたため、ルドルフ・シュタイナーと出会う前から、フリーメイソン的性格を持つ秘教的なグループと関わりを持っていました。このグループは、通常のフリーメイソンリーとは異なり、男性と女性が平等に会員になれるものでした。この「Stella Matutina」（明けの明星）は、20世紀初頭に「Golden Dawn」（黄金の夜明け団）と名乗る薔薇十字的な秩序から分離して生まれたものです。ゴールデン・ドーン）の何人かの会員が脱退し、Dr. F.W. フェルキン〔訳註：Dr. F.W. Felkin（ロバート・ウィリアム・フェルキン）。19世紀末から20世紀初頭にかけての魔術結社「黄金の夜明け団」の歴史における最重要人物の一人。〕の指導の下で独立した団体を形成しました。フェルキンは常に真の薔薇十字を探し求め、1906年以降、断続的にルドルフ・シュタイナーと連絡を取っていましたが、自身や支持者たちは神智学協会や人智学協会には入会しませんでした。

エディス・マリオンもこのフェルキンの団体に所属していました。フェルキンは彼女の主治医でもあり、彼女をルドルフ・シュタイナーに紹介しました。おそらく、英語訳されたシュタイナーの二つの基本著作『神智学』と『いかにして高次の世界の認識を獲得するか？』も彼女は知っていたと思われます。1912年10月16日付の手紙で、彼女は初めてルドルフ・シュタイナーに手紙を出し、フェルキン博士の紹介を挙げて個人的な面談を求めました。11月15日付の手紙で再度依頼し、その間に自身の作品「The Seeker of Divine Wisdom」（神の叡智を求める者）の写真を送りました（図版参照）。この作品は、祝福するキリストを中心としたレリーフ（フリーズ）で、9人の人物に囲まれています。それぞれの人物は、服装、姿勢、表情によって人類の特定の文化時代を代表しています。キリストの周囲の人物たちには、豊かな象徴性があります。

返事がまだ来ないまま、フェルキン博士がニュージーランドへ旅立って新しいグループを設立しようとし、ロンドンでの彼の代理人で、マリオンとも親しかったネビル・ミーキン〔訳註：Neville Meakin, 1876–1912）は、Dr. フェルキンが最も信頼を寄せた弟子の一人であり、「暁の星（ステラ・マチュティナ）」の非常に重要なアデプト。〕が亡くなったため、彼女は神智学者のハリー・コリソン〔訳註：Harry Collison。Dr. フェルキンが率いた「暁の星（ステラ・マチュティナ）」のメンバーであり、英国におけるルドルフ・シュタイナーの思想（人智学）の普及に決定的な役割を果たした人物。〕に仲介を依頼しました。コリソンはマリー・フォン・ジーフェルスに連絡し、エディス・マリオンのためにシュタイナーとの面談を設定し、通訳を

務め、会員講演への参加を許可するよう依頼しました。これにより、1912年12月10日にベルリンでルドルフ・シュタイナーと会うことができました。その後ケルンで講演を聴き、12月31日にそこで自分の願いを直接伝えることができました。

イングランドに戻った後、彼女はドイツへの移住を準備しました。1913年5月13日にミュンヘンへ行き、ドイツ語を学びながら仕事を探しました。11月からはベルリンに滞在し、モッツ通り17番地に住みました。これはルドルフ・シュタイナーと同じ住所です。1913年3月13日付の手紙で、彼女はルドルフ・シュタイナーに「自分の全運命を人智学と結びつけることを許してほしい」と依頼しました。彼女の死後、ルドルフ・シュタイナーは会員たちに当時のことをこう語っています。「十数年前にエディス・マリオンが私たちのところに来ました。彼女はすでに秘教的な探求に全身で取り組んでいた人格でした。彼女の内なる人生は、この探求で完全に満たされていました。人智学運動の中で、彼女はこの探求をさらに発展させようとしました。明確な内的確信を持って、この運動と結びついたのです。」（GA 260a）。

1914年1月18日にベルリンで開催された人智学協会の総会で、ドルナハの建築のために芸術的な協力者がまだ必要であることを聞き、翌日すぐに手紙でルドルフ・シュタイナーに協力を申し出ました。マックス・ベンツィンガー〔訳註：Max Benzinger。ハリー・コリソンらと共に、ルドルフ・シュタイナーの人智学と、Dr. フェルキンの「暁の星（ステラ・マチュティナ）」を繋いだドイツ系の重要人物。〕の日記（当時ドルナハで働いていた）によると、彼女は1914年2月1日にはすでに模型制作に従事していました。完全にドルナハに移住するために一度イギリスに戻る必要があったため、ミュンヘンを経由して旅をし、3月末に再びシュタイナーの講演を聴き、話す機会も得たと思われます。帰路で彼女は重病に倒れました。1913年以来ニュージーランドから戻っていた彼女の主治医フェルキン博士は、彼女が「死の門のすぐ近くにいた」と語りました。ルドルフ・シュタイナーは後年、「彼女はイギリスへの旅の途中で非常に重い病気を経験しました。その病は、もし本格的に再発すれば、エディス・マリオンはこの地上に留まることはできないだろうと思われるものでした。しかし当時、彼女は親しい医師フェルキン博士の尽力によって回復し、1914年に再び私たちに返され、ゲーテアヌムのさらなる仕事に携わることができました」（GA 261）と述べています。

「建築」の仕事において、彼女は「自身の特別な芸術家性という側面から」（ルドルフ・シュタイナー、GA 261）、ルドルフ・シュタイナーの塑像的大作である、いわゆる「グループ」――「ルシファーとアーリマンのはざまでの人類の代表者」――の最も親しい協力者となりました。1918年までの第一次世界大戦中、彼女は彫刻工房、または彼女が呼ぶところの彫刻アトリエで働きました。戦時中の困難にもかかわらず、工房の仕事を継続させました。1917年には、友人のシャルロッテ・フェレーリ〔訳註：Charlotte Ferreri。フェルキンやルドルフ・シュタイナーを繋ぐ人智学・秘教サークルのネットワークにいた女性。〕を通じてミラノから特定の木材の大きなブロックを入手し、作業を中断することなく続けられるようにしました。

ルドルフ・シュタイナーがエディス・マリオンとの共同作業をどれほど高く評価していたかは、彼女の死後に何度も語られています（GA 260a、GA 261）。彼は、彼女の「精神的な臨在」を明確な「カルマ的な兆候」として挙げました。おそらく1916年末か1917年初頭、彼女は彼が足場から落ちそうになるのを救いました。それは彼の活動能力の終わりを意味しかねない事故でした。

戦争末期、特に1919年以降、エディス・マリオンはいくつかのイニシアチブを始めました。その成果は今日も有効であるだけでなく、将来も当然のように受け継がれています。まず挙げられるのは、現在広く知られるオイリュトミー人形です。これは彼女の提案に由来します。彼女は彫刻的手法でオイリュトミーの動きを捉え始め、ルドルフ・シュタイナーの指示とスケッチのもとで、ベニヤ板を切り抜き、彩色したオイリュトミー人形へと発展しました（詳細は『オイリュトミー人形のための原案』GA K 26、『ルドルフ・シュタイナーのオイリュトミー人形』GA K 26a参照）。彼女がオイリュトミーに関連して制作したメダル、丸彫、浮彫は複製され、販売が試みられました。スイスでは、ザンクト・ガレンの支部会員が販売を引き受けました。わずかな売上は、彼女自身への手数料を一切引かず、すべて「スイス三分節化連盟」の口座に直接振り込まれました。

もう一つのイニシアチブは、協力者の住宅難から生まれました。彼女自身はアリエスハイムのローザナウ荘に住んでいましたが、1919年半ばに、より高い家賃を支払う希望者が現れたため立ち退きを求められました。その後、同じアリエスハイムのサン・ゲオルク荘に移りました。そこで彼女は、住宅難と高額家賃への依存を解消する方法を考え、「小さな家を建て、部屋を30〜35フランで提供する」という構想を抱きました（手紙No.27参照）。母から資金が得られれば、カンティーヌ近くの土地を購入して小さな住居を建てるつもりでした。しかし建築家たちとの最初の話し合いの後、すぐにルドルフ・シュタイナーがこの提案を引き継ぎ、1920年4月9日に「ゲーテアニスムス協会（Verein Goetheanismus）」を設立しました。設立時にシュタイナーは目的を次のように述べています。

「この新しい協会には、企業を設立し、最終的にこの建築の中で行われるべきことに繋がるすべてのことが委ねられなければなりません。第一に、小さな基金を基に、ここで働く人々のためのいくつかの家を建設することが必要であることが明らかになりました。この企業は、厳密に私が執行する形でなされなければなりません。なぜなら、それが資金が与えられた条件だからです。……家々の建設はすでに始まっています。14日ごとに分割払いが必要になるでしょう。近日中にさらに詳しく知らせます……」

「この企業は厳密に私が執行する形でなされなければなりません」という言葉をルドルフ・シュタイナーがどれほど真剣に受け止めたかは、借金の返済に関する証書（彼自身が手書きしたもの）からもわかります。「ゲーテアニスムス協会」の他の決議書類も、彼の手書きで作成されています。

「オイリュトミー住宅」と呼ばれるこれらの家々は、エディス・マリオンの模型に基づいて建てられました。ルドルフ・シュタイナーは彼女に詳細な指示を与えました。彼がドルナハを頻繁に離れることが多かったため、彼女が建築の進行管理を担うことがしばしばありました。入居後も、彼女は家賃や諸経費の分配・精算業務を担当しました（彼女自身も入居者の一人でした）。

オイリュトミー住宅の模型以外にも、彼女は他の建物の模型も制作しました。たとえばアリエスハイムのヴレーデ邸の模型の準備も始めました。エディス・マリオンとエリーザベト・フレーデは親友でした。フレーデは1914年にドルナハに来た当初、エディスと一緒に住んでいました。彼女が準備した模型は、ルドルフ・シュタイナーによって修正されました。（エーリヒ・ツィンマー『ルドルフ・シュタイナー ― 住宅および目的建物の建築家として』1971年参照）

彫刻アトリエは、エディス・マリオンにとって第二の家のようなものでした。差出人住所として「ゲーテアヌム彫刻アトリエ」と書かれることが多く、花の装飾や室内温度に細心の注意を払っていました。室温管理により、彫刻用の巨大な木塊が構造を保つようにしていました。ルドルフ・シュタイナーもアトリエで働くのを好んだようで、手紙のほとんどが「また工房で働きたい」という言葉で終わっています。グループ制作の共同作業を通じて、彼女は他の多くのゲーテアヌム建設関係者とは比べものにならないほど、長時間ルドルフ・シュタイナーと同じ作業室で過ごすことができました。彼女の忠実なパートナーであったゾフィー・バウアー〔訳註：Sophie Bauer。初期の英国人智学運動および魔術結社「ステラ・マチュティナ」の周辺にいた女性の一人。〕の記述によれば、ルドルフ・シュタイナーは講演の直前まで彫刻アトリエにいて、エディス・マリオンと共に姿を現すことが多かったといいます。「講演の少し前に、工房でシュタイナー博士が彫刻アトリエの扉から出てくる姿が見られました。同行していたマリオンの高貴で細身の姿は、一目でイギリス人であることがわかりました。赤い髪、繊細で透明感のある肌、意識的で生き生きとした青い目、力強い顎の形――高い身長に優雅な魅力が漂っていました。」（フリッツ・ゲッテ「エディス・マリオン追悼」『ドイツにおけるアントロポゾフィー活動通信』1954年、p.72）

ドルナハの仕事に深く根を下ろしながらも、彼女はイギリスの友人たちを決して忘れませんでした。彼女のイニシアチブとイギリスの友人マッケンジー教授〔訳註：Kenneth R. H. Mackenzie, 1833–1886。黄金の夜明け団（ゴールデン・ドーン）の創設に関わった人物。〕の支援により、さまざまな困難を乗り越えて1921年のクリスマスに教育コースが開催され、多くのイギリスの教師たちがゲーテアヌムを訪れました。また、ルドルフ・シュタイナーのイギリス講演の実現も、彼自身の言葉によればエディス・マリオンの無私の努力によ

るものでした。1922年、1923年、1924年にイルクリー、ペンマエンマウル、オックスフォード、トーキー、ロンドンで行われた講演シリーズは全集に収録されています。また、彼が『ゲーテアヌム』週刊誌（第3年、第5・6号）に寄稿した旅行記もあります。エディス・マリオンはドルナハからこれらの旅行を多方面にわたり準備・調整しました。彼女自身がイギリスに滞在して世話をする機会も多かったのですが、この仕事はあまり表に現れませんでした。たとえばハリー・コリソン〔訳註・Harry Collison。ゾフィー・バウアーの長年の伴侶。〕の手紙には、彼女が土地勘のある運転手付き自動車の手配にどれほど尽力したかが記されています。

1922年から1923年の大晦日の夜、ゲーテアヌムが放火により全焼した際、エディス・マリオンも敷地内でこの恐怖の夜を体験しました。ルドルフ・シュタイナーが彼女と共に、工房から少し離れた小屋に避難し、炎の海を眺めていたという報告があります。（マリー・クライナー「ゾフィー・バウアー追悼」『ドイツにおけるアントロポゾフィー活動通信』1959年、p.46）

ルドルフ・シュタイナーの言葉によれば、この火事の夜の衝撃が、エディス・マリオンに病の種を植え付けました。ウェークマン医師が最善を尽くしたにもかかわらず、細心の看護をもってしても癒すことのできなかった病でした（GA 260a、GA 261）。

1923年の間、彼女がアトリエで働けず、寝たきりになる日が次第に増えました。1923年1月17日に母がイギリスで亡くなったとき、彼女は葬儀に出席することができませんでした。秋以降は常時介護が必要になりました。ゾフィー・バウアー、マリー・カラーネ〔訳註：Marie Kalane。人智学）と、黄金の夜明け団系の魔術伝統（ステラ・マチュティナ）を繋いだ英国の重要メンバーの一人。〕、イルマ・クチェロヴァ〔訳註：Irma Kučerová / Irma Kucerova。ゲーテアヌムでルドルフ・シュタイナーの活動を支えた女性芸術家の一人。〕、マリア・クライナー〔訳註：ゲーテアヌムを中心とした芸術家コミュニティの中核にいた女性。〕が愛情と献身をもって介護を担いました。エディス自身も、ある晩、介護者がシュタイナーの講演を諦めて自分に付き添い、読み聞かせをしてくれたことに感動して語っています。

ルドルフ・シュタイナーの報告によれば、彼女は苦痛に満ちた時間を過ごし、特に最晩年には言葉に尽くせない苦しみを味わいましたが、驚くべき穏やかさで重い病を耐え忍びました。シュタイナーがドルナハにいる間は、毎日彼女を訪れ、新聞記事を読んで解説し（彼女は依然として時事に関心を持っていました）、協会の出来事を伝え、ユーモアを交えて痛みを忘れさせようとしました。（マリー・クライナー追悼文『ドイツにおけるアントロポゾフィー活動通信』1967年、p.58）

彼女が回復する可能性を信じて、1923年クリスマスの協会再建時に、ルドルフ・シュタイナーは彼女を造形芸術部門の責任者に推薦しました。彼女は病床でこの新しい任務について多くを考えました。しかしこの新しい任務に取り組むことは叶いませんでした。また、1924年1月21日のゲーテアヌム支部年次総会で、アルバート・シュテッフェンの提案により満場一致で副会長（会長：エーミール・グロシェインツ博士）に選出された任務にも就くことはできませんでした。

1924年4月23日、ドルナハ自治体から滞在許可（1925年4月17日まで有効）が与えられました。住所はヘルツェンタールヴェークと登録されています。

1924年5月2日、金曜日の午前0時15分、彼女は苦しみから解放されました。イタ・ヴェークマン医師がそばにおり、最期の言葉は「私はとても弱い、もう彼が来るまで待てない」だったと言われています。ルドルフ・シュタイナーはシュトゥットガルトから1時間ごとに到着が待たれていました。

シュタイナーは夕方にドルナハに到着するとすぐ彼女の元へ行き、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの親族や友人に連絡し、火葬に必要な手続きを整えました。5月6日のバーゼルでの火葬では、彼の希望によりフリードリヒ・ドルディンガー〔訳註：Friedrich Doldinger, 1897–1973。キリスト者共同体の創設メンバーの一人〕が葬儀を執り行いました。自身は5月3日のドルナハの会員講演と火葬の際に追悼の言葉

を述べ、始めと終わりにエディス・マリオンへの言葉を捧げました。この言葉の中に、彼女の生涯を深く象徴する一節があります。

働きの意味	心の意味	耐え忍ぶ意味
Wirkenssinn	Herzenssinn	Duldersinn
犠牲の力	精神の力	祝福の力
Opferkraft	Geisteskraft	Segenskraft

エディス・マリオンはルドルフ・シュタイナーを自分の相続人に指名していました。相続財産にはイギリスの土地所有権も含まれていました。彼女のわずかな私物は介護者や兄弟姉妹に遺されました。ルドルフ・シュタイナーは相続権を家族に譲りました。遺言執行者はアルバート・シュテッフェンが務めました。

エディス・マリオンの骨壺は、ゲーテアヌムの骨壺安置室に納められています。

コンラート・ドナート」